

清音三音節名詞の意味に関する研究(二)

— 語 価 値 類 型 論 —

藤 原 哲

I 問題

本稿は、「言語の視覚的認知関」に関する研究のための基礎的作業である。

言語の視覚的認知関に関する事実の解釈は、研究史的には、言語の使用度数を強調する学習理論の立場(11)と、言語の語価値の要因を主張する、知覚過程のモチベーション理論の立場(9・10)とが対立してきた。ところが最近、言語の使用度数が異なると、あるいはそれを変化させると、言語の他の属性、語価値が一般的には異なること、あるいは変化してくる事実が発見された(5・6)。言語の視覚的認知関に関する理論は別の角度からの実験の集積を待たなければならぬ現状にある。ここに要請される一問題は、実験の刺激材料として、言語の使用度数をマッチングした、語価値の異なる言語材料と、語価値をマッチングした使用度数の異なる言語材料を選び、言語の使用度数、あるいは語価値の、言語の視覚的認知関に及ぼす効果を究明しなければならないことである。筆者は、このような実験のための言語材料を選出する目的で、語の使用度数(正確

には熟知値)が研究された、清音三音節名詞の、特に評価的次元を含む三次元的意味を、意味微分法によって測定した。

この調査における語価値と言語の視覚的認知関の関係、および、語価値を一定にした条件下における使用度数と認知関の関係を検討することによって、認知関を規定する決定因の究明に新しい知見が加えられると予想される。しかし、もし同一の語価値の範疇に属する刺激語群にも、異質のものが含まれていて、ある下位分類が可能であるとすればどうであろうか。この類型を支える潜在的因子の、言語の認知関に及ぼす効果が問題になるであろう。

本稿は、この語価値の類型に関する研究の一部である。ここでは特に、集団の意味として刺激語が分化している刺激語(語価値が「よい」か「わるい」かはっきりしている語)群における語価値の類型を考察の対象にし、次の二つの課題を設けた。

一、もし言語主体の価値体系が、ことばの語価値の判断に反映されるならば、では、評価的尺度上の個人の意味評定を分析の対象とす

ることによって、たとえばオルポート G・W・(1)らのいう、理論的、経済的、審美的、社会的、政治的、宗教的価値等の、ある価値体系を反映した語価値の類型が認められるだろうか。

二、もし意味空間を構成する三つの軸(次元)が相互に独立であり、記号の意味が、一定の行動を誘発させる学習された内在的状态・表象的媒介過程であるならば、では、三次元的意味空間における刺激語の位置を分析の対象にすることによって、新しい意味論的語価値の類型が認められるだろうか。

Ⅰ 方法

調査方法・手続きは、抽稿(4)に詳しく記した。ここではその骨組を略記する。

調査で使用した刺激語は、単語の熟知価(7)と語価値の基準から選出した。予備調査の結果により、単語の熟知価と語価値の観点から、刺激語が同じ条件になるように二分類され、任意に、第Ⅰ形式・第Ⅱ形式と名づけられた二種類の調査票を作成した。両形式とも、大学学部の文科・理科系集団を被調査者とし、熟知価の「高」(第Ⅰ類)・「中」(第Ⅱ類)・「低」(第Ⅲ類)の刺激語の意味判断をしてもらった。方法は、七段階評定による意味微分法により、意味評定尺度として、意味構造に関する研究から(2・3)、安定性の高い三次元を代表する、「E」よいーわるい、「P」かたいーやわらかい、「A」能動的ー受動的尺度の三尺度を使用した。本稿で分析の対象としたのは、調査第Ⅰ形式における刺激語と被調査者で、刺激語が第Ⅰ類五〇語、第Ⅱ類五〇語、第Ⅲ類四九語で、被調査者が大学生文科系二七名、理科系二一名であった。

Ⅱ 結果と考察

一、価値体系と語価値の類型

「E」尺度上、「非常にわるい」「相当にわるい」「ややわるい」「どちらでもない」「ややよい」「相当によい」「非常によい」の各段階に、左からそれぞれマイナス三、マイナス二、マイナス一、〇、プラス一、プラス二、プラス三の段階点を与えた。各刺激語毎に評定平均値を算出し、その価がマイナス三・〇〇乃至マイナス一・〇〇に範圍する語を「わるい」語価値の範疇に屬する刺激語とし、マイナス〇・九九乃至プラス一・〇〇に範圍する語を「どちらでもない」の範疇に屬する刺激語とし、プラス一・〇〇乃至三・〇〇に範圍する語を「よい」範疇に屬する刺激語とした。熟知価第Ⅲ類には、「よい」範疇に屬する刺激語がなかった。

語価値が「よい」範疇に屬する刺激語と各個人の、「E」尺度上の評定値からなる行列表を作成し、刺激語の軸を「法(8)」による因子分析を行なった。分析の結果得られた次元(I・II)上の各刺激語の等位置を二乗し、その価を各刺激語のベクトルの長さを二乗した価で割算した。この価が、第Ⅰ表における各刺激語の因子負荷量である。

第Ⅰ因子に最も負荷量の高い語は、集団の意味としてその刺激価が最も分化している「ヘイワ」である。加えて、三一語総てが、この第Ⅰ因子に高く負荷している。第Ⅰ因子には、全分散の四一・〇七パーセントが含まれており、共通分散の九六・三五パーセントが含まれている。また、語価値の価と、第Ⅰ因子の負荷量との錯差積相関係数 r は〇・八七九である。これらの事実から、第Ⅰ因子は、「よい」語価値の一般因子と解釈される。第Ⅱ因子への各刺激語の負荷量は、第Ⅰ因子への負荷量と比較して、非常に低くなってお

第1表 語価値が「よい」の範疇に属する31語
の因子負荷量——一次元的意味のばあい——

番号	熟知語	語価値	I	II	h ²
1	ヘイワ	2.19	1.000	.000	1.000
2	スナオ	2.08	.833	.003	.691
3	マコト	2.04	.787	.001	.619
4	リソウ	2.02	.842	.000	.709
5	ユウキ	2.00	.896	.001	.803
6	ヒカリ	1.85	.784	.007	.615
7	アサヒ	1.75	.759	.000	.570
8	リカイ	1.75	.752	.009	.566
9	オトメ	1.65	.561	-.012	.315
10	コウイ	1.56	.704	.000	.496
11	ワライ	1.54	.588	.005	.346
12	アカリ	1.50	.659	.004	.434
13	エホン	1.38	.603	.018	.364
14	ケイコ	1.15	.524	.065	.279
15	フトン	1.08	.527	.001	.278
16	ミカタ	1.08	.491	.021	.242
17	ハナシ	1.01	.502	.001	.252
18	イヨク	1.90	.798	-.003	.637
19	ツキミ	1.73	.777	.000	.604
20	エイチ	1.69	.573	-.007	.328
21	ハツヒ	1.65	.573	.008	.328
22	エイキ	1.48	.528	-.006	.279
23	フウミ	1.46	.570	.001	.325
24	オンシ	1.38	.671	.003	.386
25	ユウワ	1.33	.378	.063	.147
26	ホマレ	1.33	.629	.005	.396
27	シンカ	1.25	.405	-.007	.162
28	ケツイ	1.21	.369	.000	.136
29	ソコク	1.19	.399	-.012	.157
30	テンシ	1.19	.314	.687	.571
31	カホウ	1.02	.416	.037	.174
全分散の百分率			41.07	1.56	.4263
共通分散の百分率			96.35	3.65	1.0000

り、第Ⅰ因子の解釈が困難であると同時に、その意義がなさそうである。

以上の結果からは、集団的意味としてその刺激語が分化している刺激語群において、言語主体の価値体系が反映された語価値の類型は認められない。ではなぜ期待される結果が得られなかったのであるのか。その理由を、語価値と意味判断の個人差の關係から考察してみたい。

集団的意味すなわち刺激語の意味評定平均値を、今「集団基準」と定義しよう(4)。集団基準からの意味の逸脱程度の大である個

人は、意味判断する刺激語の条件が異なっても、たとえそれが語価値であれ、熟知語の要因であれ、一貫して高度の逸脱を示す。集団基準からの意味の逸脱程度は、言語主体の意味論的指標になる。

集団基準からの意味の逸脱程度の大である言語主体の意味反応様式の特徴は、尺度上両極(「非常にわるい」と「非常によい」)の段階、を選択する傾向があり、意味判断の信頼性も低いことである。以前研究した、意味判断における尺度上の位置習慣と精神発達・ことばに対する感受性の敏感さとの対応関係(2)から、集団基準からの意味の逸脱程度の大である個人は、ことばに対する感受性が豊か

でない」と解釈される。これを裏書きするかのようには、逸脱程度の大である個人の、集団的意味としてその刺激価が分化している刺激語群に対する意味判断には、次のような特色がある。すなわち、逸脱程度の大である個人が、尺度上両極を選択する位置習慣を持っていないながら、集団内において分化している刺激語の刺激価の純度を混濁させる働きをしていることである。

今、集団基準からの意味の逸脱が、尺度上陽極方向（「よい」の極への方向）に逸脱している程度と、陰極方向（「わるい」の極への方向）に逸脱している程度の比率を、「意味の相対的逸脱方向性」と呼ぼう。もし、集団内において分化した刺激語群の意味判断に、言語主体の価値体系が反映され、言語主体の内的世界の投影が行なわれているとすれば、刺激価が陽極方向に分化している刺激語群の意味判断における意味の相対的逸脱方向性は、刺激価が陰極方向に分化している刺激語群の意味判断における意味の相対的逸脱方向性と、一貫性を示すはずである。しかし、集団基準からの意味の逸脱程度の大である個人が、前述のように、分化した刺激語の刺激価の純度を下げる作用をするために、意味の相対的逸脱方向性には、判断する刺激語の条件間で一貫性が認められない。このことから刺激価の分化した刺激語群の意味判断の条件下において、意味判断を規定する要因は、価値体系が反映され、内的世界の投影が行なわれるという、言語主体の内的要因よりも、刺激価をそのまま反射させる感受性の敏感さであり、刺激の側の外的要因であると解釈される。それに対して、集団の意味として刺激価の未分化な刺激語群に対する意味判断では、ことばに対する感受性の敏感さとは無関係に、言語主体の内的世界の鏡に屈折された意味の相対的逸脱方向性

が、個人内において法則的な一貫性を示す（4）。

これらの事実には、集団的意味として刺激価が未分化な刺激語群に対する意味判断においてこそ、個人の内的世界が投影されること、そしてその様相が、意味の相対的逸脱方向性指数によってはっきりと把握されることを示したが、分化した刺激語群に対する意味判断では、言語主体の内的世界や価値体系による屈折の余地が少ないことを示している（4）。分化した刺激語の判断でも、各刺激語を一對にした相対的判断をする事象では、事情は異なるうが、語価値が分化した刺激語群の、「E」尺度上の判断のみを対象にした因子分析では、「よい」ことばを支える、いく種類かの潜在的因子の抽出は困難であると解釈される。

二 意味論的語価値の類型

この節は、三次元的意味空間における各刺激語の位置を分析の対象とする。価値体系の反映を狙った語価値の類型では、個人の意味が問題になるが、意味空間における各刺激語の位置を分析の対象とするかぎり、そのより妥当な価を求めるためには、個人の意味よりも、集団の平均値の意味の方が望ましい。この理由から、文料系・理科系集団の各集団を任意に二分した四集団毎に、語価値が「よい」と「わるい」範疇に属する刺激語の、「E」・「P」・「A」三尺度上の評定平均値を算出した。「よい」ことばと「わるい」ことばごとに、尺度と刺激語の行列表を作成し、刺激語の軸に対して、D—法による因子分析を行なった。「よい」ことばのばあい、行列表の行は、四集団毎の三尺度の十二行、列は三一刺激語列であった。分析の結果得られた次元（I・II・III）上の各刺激語の等位置を二

第2表 語価値が「よい」の範疇に属する31語の因子負荷量
—三次元的意味のばあい—

番号	熟知 値	刺激語	語価値	I	II	III	h ²
1	第 I 類	ヘイワ	2.19	.825	.158	.017	.706
2		スナオ	2.08	.912	.080	-.007	.838
3		マコト	2.04	.093	.804	-.101	.665
4		リソウ	2.02	.023	.951	-.025	.906
5		ユウキ	2.00	-.011	.989	.000	.978
6		ヒカリ	1.85	.231	.765	.003	.639
7		アサヒ	1.75	.192	.788	.019	.658
8		リカイ	1.75	.030	.941	-.027	.887
9		オトメ	1.65	1.000	.000	.000	1.000
10		コウイ	1.56	.240	.707	.054	.560
11		ワライ	1.54	.279	.448	.273	.353
12		アカリ	1.50	.888	.089	.023	.797
13		エホン	1.38	.960	.056	.003	.923
14		ケイコ	1.15	-.087	.911	-.002	.837
15		フトン	1.08	.957	-.039	.004	.917
16		ミカタ	1.08	.652	.294	-.055	.515
17		ハナシ	1.01	.495	.369	.135	.399
18	第 II 類	イヨク	1.90	-.606	.990	.004	.980
19		ツキミ	1.73	.976	.012	-.011	.953
20		エイチ	1.69	.003	.961	-.035	.925
21		ハツヒ	1.65	.341	.636	.024	.521
22		エイキ	1.48	-.015	.917	-.068	.846
23		フウミ	1.46	.997	.002	.001	.994
24		オンシ	1.38	.923	.073	-.003	.857
25		ユウワ	1.33	.887	.066	.047	.793
26		ホマレ	1.33	.692	.272	-.037	.554
27		シンカ	1.25	-.029	.636	-.332	.516
28		ケツイ	1.21	-.254	.692	-.053	.546
29		ソコク	1.19	.069	.612	-.307	.474
30		テンシ	1.19	.866	.105	.030	.762
31		カホウ	1.02	.984	.015	.001	.963
			全分散の百分率	38.78	35.22	1.06	.7506
			共通分散の百分率	51.66	46.92	1.42	1.0000

乗し、その値を各刺激語のベクターの二乗した長さで割った。その値が第2表における各刺激語の因子負荷量である。
意味空間における刺激語の位置を分析することによって、語価値の類型が得られた。第I因子に負荷量の大であった語は、「ヘイワ」「スナオ」「オトメ」「アカリ」「エホン」「フトン」「ツキミ」

「フウミ」「オンシ」「ユウワ」「テンシ」「カホウ」等である。それに対して第II因子に負荷量の大であった語は「マコト」「リソウ」「ユウキ」「ヒカリ」「アサヒ」「リカイ」「ケイコ」「イヨク」「エイチ」「エイキ」「シンカ」「ケツイ」等である。第I因子が、軽い気持ちで心地よく感じる語によって代表されているのに対

して、それとは対照的に、第Ⅱ因子は、まじめな傲爾さを覚えさせる
敵しい語によって代表されている。両因子を視覚的観点から比較す
ると、多少の例外はあるが、第Ⅰ因子が暖色を、第Ⅱ因子がより寒
色を連想させる。また聴覚的には、第Ⅰ因子が低音の協和音を、第
Ⅱ因子が高音の不協和音を、触覚的には、第Ⅰ因子が丸みを帯びた
柔らかさに対して、第Ⅱ因子が磨きすまされた堅いナイフを連想さ
せる。運動的には、第Ⅰ因子が静止状態を、第Ⅱ因子が上昇運動を
感じさせる。第Ⅰ因子が女性的消極性因子であるのに対して、第Ⅱ
因子は、男性的積極性因子である。前者が現実快樂的耽美主義的傾
向の因子であるのに対して、後者は、何か悲劇性を覚えさせる理想
主義的傾向の因子である。ここでは、第Ⅰ因子を『善の耽美性因
子』、第Ⅱ因子を『善の理想性因子』と命名しておきたい。

第Ⅰ因子における「アカリ」と、第Ⅱ因子における「アサヒ」
「ヒカリ」とは、一見同質の単語のようであるが、単なる現象とし
ての「アカリ」と、理想や希望、前進的意欲の象徴である「アサ
ヒ」「ヒカリ」「ハツヒ」とは、意味論的に異なった刺激物のこと
ばであることがわかる。また「ヘイワ」を追求する過程は、善の第
Ⅱ因子の性格を帯びたものであろうが、「ヘイワ」な状態は、柔ら
かく女性的で心地よく、耽美的な性格のものとして受け取られるよ
うである。

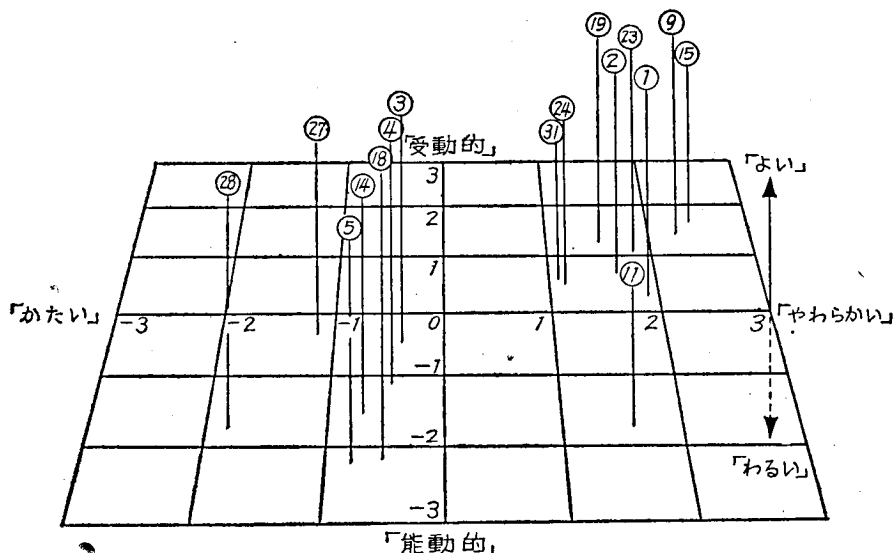
善の第Ⅲ因子に負荷量の大であった語は、「ワライ」「ソコク」
「シンカ」である。「ソコク」「シンカ」が第Ⅱ因子への負荷量も
高かったので更に検討を要するが、この因子を『善の諧謔性因
子』と命名しておく。第Ⅲ因子の、全分散に対する百分率が一・〇
六パーセントで、共通分散に対する百分率が一・四二パーセントで

あるので、この第Ⅲ因子が、「よい」語価値の類型を支える、主要
な潜在的因子であるとは解釈されない。「よい」語価値の因子は、
『善の耽美性』と『善の理想性』の因子である。

では、「よい」語価値における対照的な第Ⅰ因子と第Ⅱ因子を代
表する語は、意味空間のどんな場所に位置しているであろうか。こ
れを、他の因子を代表する語も加えて、模式的な「意味論的地図」
に図示すれば次頁のようになる。図中、刺激語からの投射の基部は、
〔P〕・〔A〕尺度上の集団（四八名）の評定平均値を示す。刺激語か
ら基部への投射の長さも、〔E〕尺度上の集団の評定平均値を示す。

図中○数字は、第2表における刺激語の序列番号である。図が繁
雑になるので一部の刺激語は図から省略した。この第1図から、第
Ⅰ因子と第Ⅱ因子を代表する語が、意味空間の異なった、対照的な
位置にあることが理解される。また「よい」語価値の語は、図のよ
うに表わされた意味空間を真上から見た場合の平面の四つの象限
に、平等に位置するのではなくて、「よい——かたい——能動的」
対「よい——やわらかい——受動的」の有勢な線上に位置するよう
である。

語価値が「わるい」範疇に属する刺激語群の因子と因子負荷量を同
様な手続きで算出した。結果は第3表のとおりである。第Ⅰ因子に
負荷量の高かった語は、「ウラミ」「カタキ」「タイホ」「キケ
ン」「モンク」「フマン」「アクイ」「ユスリ」「サツイ」「クモ
ン」「シウチ」等である。最も高かったのは「サツイ」である。悪の
第Ⅰ因子は、積極的男性的意図的な色彩を帯びた道徳的悪である。
第Ⅰ因子は、敵しさと、鋭さと、痛さと、下降運動を感じさせ、戦慄
感を誘発させる。この因子は、『善の理想性因子』と全く逆の方向



第1図 語価値が「よい」の範疇に属する語の意味空間における位置

の悪である。今「反」の意義を「逆」の意義に使って、この因子を、「悪の反理想性因子」と命名したい。

第Ⅰ因子に負荷量の高かった語は、「ジニン」「ヒョク」「イタミ」「メマイ」「オンチ」「キトク」「ロウヤ」「トンシ」「センシ」「シヨリ」「モフク」「ミイラ」「ヒハイ」等である。まず気をつくことは、「ジニン」「キトク」「トンシ」「センシ」「モフク」「ミイラ」等、「死」に関係した単語が多いことである。しかし『悪の反理想性』に認められたような、鋭い悪魔的な戦慄感や誘発させない。この因子は、第Ⅰ因子に反して消極的無意図的非運動性を感じさせると同時に、灰色の鎖に縛られた、目を覆いたくなく無慚な姿と悪臭を感じさせる。この因子を、「善の理想性」と『悪の反理想性』に対比させて、『死』をも含めた『悪の反耽美性因子』と命名したい。

第Ⅲ因子に負荷量の高かった語は、「アホウ」「ロウヒ」「アキス」「フニク」「ウロン」等である。この因子は、負荷量の高い刺激語数が少ないので解釈が困難であるが、「アホウ」「ロウヒ」が特に高い負荷量を持っているので、一応、『悪の劣等性因子』と命名しておく。

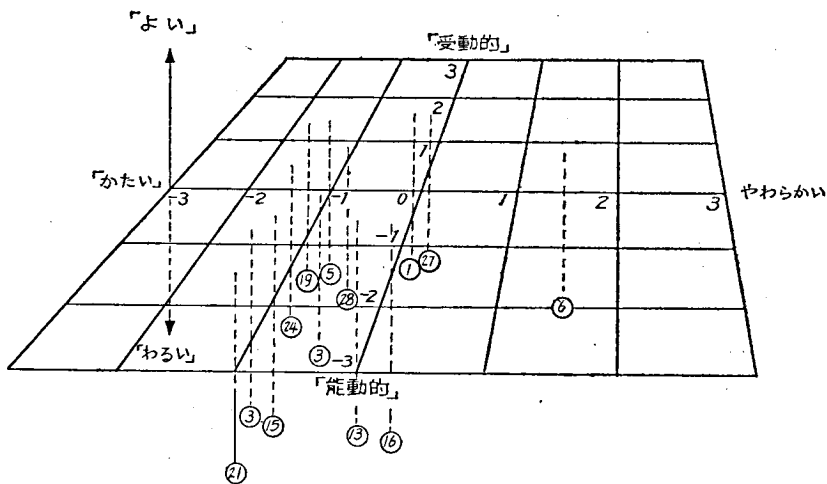
悪の三因子を代表する刺激語の、意味空間における位置を模式的な「意味論的地図」に図示すれば次のようになる。図が繁雑になるために類似の位置にある刺激語は省略した。図中の数字は、第3表における刺激語の序列番号である。この図から、「わるい」語価値の語が、平面化したばあい、四つの象限に等しく位置していないことに気がつく。また、「よい」語価値の語が、意味空間に位置する様態と、対応していないことに気がつく。「よい」語価

第3表 語価値が「わるい」の範疇に属する31語の因子負荷量
—三次元的意味のばあい—

番号	熟知 語	刺激語	語価値	I	II	III	h ²
1	第 I 類	シニン	-2.00	.162	.750	.087	.596
2		ウラミ	-1.75	.502	.274	.224	.377
3		カタキ	-1.67	.934	.054	-.012	.875
4		タイホ	-1.60	.711	.284	.005	.586
5		ヒコク	-1.48	.152	.832	-.016	.716
6		アホウ	-1.37	-.015	.175	.810	.687
7		イタミ	-1.35	.381	.604	.015	.510
8		クツウ	-1.33	.499	.494	-.008	.493
9		キケン	-1.29	.683	.272	-.045	.542
10		ロウヒ	-1.25	.315	.017	.669	.547
11		メマイ	-1.15	-.015	.544	.475	.522
12		オンチ	-1.12	-.053	.972	.193	.985
13		モンク	-1.12	.974	.014	.013	.949
14		フマン	-1.10	.588	.036	.376	.488
15	第 II 類	アクイ	-2.29	.700	.173	.035	.521
16		ユスリ	-2.23	.712	.018	.270	.580
17		キトク	-2.04	.487	.513	-.001	.500
18		アギス	-1.87	.451	.035	.514	.469
19		ロウヤ	-1.87	.201	.799	.000	.679
20		ソネミ	-1.83	.351	.385	.264	.341
21		サツイ	-1.73	1.000	.000	.000	1.000
22		トンシ	-1.71	.316	.570	.114	.438
23		センシ	-1.65	.483	.515	.001	.499
24		シコリ	-1.50	.370	.622	-.008	.524
25		クモン	-1.46	.539	.399	.062	.454
26		シウチ	-1.35	.683	.223	.109	.528
27		モフク	-1.21	-.005	.872	.123	.776
28		ミイラ	-1.08	.186	.795	-.019	.667
29	第 III 類	フニク	-1.56	.002	.467	.531	.500
30		ヒハイ	-1.23	.007	.821	.171	.703
31		ウロン	-1.06	.020	.358	.622	.515
全分散の百分率				25.16	25.96	8.77	.5989
共通分散の百分率				42.01	43.35	14.64	1.0000

値の語が、「よい」かたい「能動的」対「よい」やわらかい「受動的」の有勢な線上に位置する傾向があったのに対して、「わるい」語価値の語は、主として、「わるい」かたい「能動的」対「わるい」やわらかい「受動的」の有勢な線上に位置する傾向がある。この模式図の意味空間は、高さが「E」尺度の軸になっているが、「よい」対「わるい」語価値の語は、高さが異なる同一方向の線上に位置していないことが認められる。「よい」

語価値の語では、「P」・「A」次元がより共变的であるのに対して、「わるい」語価値の語では、「E」・「P」次元がより共变的になっている。また、「悪の反理想性因子」(第I因子)は、「善の理想性因子」(第II因子)と印象や連想の点で逆方向であると同時に、意味空間の位置からみても、「E」次元上だけの対称的な位置にあることが理解される。この対比をなす兩群の語価値



第2図 語価値が「わるい」の範疇に属する語の意味空間における位置

の刺激値が、語価値 (Word value) の概念に最もふさわしいもの
 のようである。この両因子において、語価値の、言語の視覚的認知
 関に及ぼす効果も、最も明瞭な姿で把握されうると予想される。

集団的意味としてその刺激価値が分化していることばの語価値の
 類型を、言語主体の価値体系および内的世界の投影を予想した、
 「E」尺度上の意味の個人差と、意味空間における刺激語の位置の二
 つの側面から考察してきた。「E」尺度上の意味の個人差を分析の対
 象としたばあい、「よい」語価値の範疇に属する刺激語群の因子分
 析による、「善の一般因子」だけが抽出されて、刺激価値の分化し
 ている刺激語群の語価値の類型には益するところが少なかった。し
 かし、集団基準からの意味の逸脱と、意味の相対的逸脱方向性の側
 面を吟味することによって、語価値の類型論のための一考察の手が
 かりを示唆してくれた。つまり集団的意味としてその刺激価値が未分
 化である刺激語群の語価値の低位分類において、この方法による分
 析が有効であると予想されることである。

意味構造に関する研究から得られた、「E」・「P」・「A」次元と、
 それによって構成される、安定性の高い意味空間に着眼し、意味空
 間における刺激語の位置を分析の対象としたばあい、次のような因
 子を抽出することができた。すなわちそれは、「よい」語価値の範
 疇に属する刺激語群における、「善の理想性因子」「善の耽美性因
 子」「善の諧謔性因子」であり、「わるい」語価値の範疇に属する刺
 激語群における、「善の反理想性因子」「善の反耽美性因子」「悪
 の劣等性因子」であった。同一の語価値の範疇に属する刺激語であ
 りながら、異なった因子への負荷量の高かった刺激語間には、印象

および連想値の点で、はっきり一線を引き得るほどに、明らかな差異が認められた。

また、意味空間における刺激語の位置を「意味論的地図」に図示すると、「よい」語価値の語は、「よい—かたい—能動的」対「よい—わらかい—受動的」の有勢な線上に位置し、「[E]と[P]次元を共变的にさせる傾向があった。それに対して、「わるい」語価値の語は、「わるい—かたい—能動的」対「わるい—かたい—受動的」の有勢な線上に位置し、「[E]と[P]次元を共变的にさせる傾向が認められた。

操作的な語価値の範疇が等しくても、意味論的には異質の刺激語の混在する刺激語群が、因子分析の手法によって、鮮かに分類された。資料を加え、方法を吟味しながら、語価値因子の妥当性をひとつと検討することが急務であるが、近き将来、語価値の潜在的因子の、言語の視覚的認知関に及ぼす効果を究明しなければならぬ。語価値の類型を考慮することによってこそ、はじめて言語の視覚的認知関に関する事実と理論は、砂上の楼閣にあらざる、真の開花を見るであらう。

文 献

- 1 Allport, G. W., & Vernon, P. E. A Study of Values; Boston; Houghton, Mifflin, 1931.
- 2 藤原 哲 意味構造の発達—オースグッドの意味微分法による—
— 国文学叢、一九五九、第二二号、一一三—一二五、
- 3 藤原 哲 美的判断の構造に関する因子論的研究—意味空間
変動性の一考察—広島大学心理学教室修士論文抄、一九六〇、六

二一—三二、

- 4 藤原 哲 清音三音節名詞の意味に関する研究(—意味の相
対的逸脱方向性—国語教育研究、一九六三、七、一八—三二)
- 5 藤原 哲 言語使用度数と語価値との関係(未発表)
- 6 Johnson, R. C., Thomson, C. W., & Frincke, G. Word values, word frequency, and visual duration thresholds. *Psychol. Rev.*, 1960, 67, 332—342.
- 7 小柳恭治・石川信一・大久保幸郎・石井榮助 日本語三音節
名詞の熟知値・心研、一九六〇、三〇、四九—五七、
- 8 Osgood, C. E., Suci, G. J. V., & Tannenbaum, P. H. The measurement of meaning. Illinois, University of Illinois Press, 1957.
- 9 Postman, L. The experimental analyses of motivational factors in perception. In J. S. Brown (Ed.), Current theory and research in motivation. Lincoln: Univer. Nebraska Press, 1953. Pp. 59—108.
- 10 Postman, L., & Schneider, B. M. Personal values, visual recognition, and recall. *Psychol. Rev.*, 1951, 58, 271—284.
- 11 Solomon, R. L., & Howes, D. H. Word frequency, personal value, and visual duration thresholds. *Psychol. Rev.*, 1951, 58, 256—270.

昭和37年10月18日稿
—(広島大学助手)—